大江戸線の立地的特色と利用者属性の比較

名古屋大学大学院工学研究科助手　正会員　田中正
名古屋大学大学院工学研究科　学生会員　砂川裕
中京大学心理学部教授　神作博

1　研究の概要

平成 12 年 12 月に全線開業した、初の環状路線地下鉄である都営地下鉄大江戸線各駅の立地的特徴（ゾーン）とアンケート調査によって得た実際の利用者属性の比較を行い、地域ごとにどのような機能が駅空間に求められているのかを考察する。アンケート概要は表-1 に示すとおりである

表-1　アンケート配布詳細

アンケート配布総数	11026 通
返却数（返却率）（平成 13 年 1 月 31 日現在）	1880 通（約 17%）
配布日時	平成 12 年 12 月 17 日　10 時～16 時 平成 12 年 12 月 18 日　8 時～10 時／11 時～16 時
配布場所	原則として改札付近（改札内）

2　大江戸線各駅の立地的特徴

大江戸線は地下鉄線としての初めての環状路線であり、既存の放射路線を主体に形成されている路線群をこの路線で有機的に結合させ、北西部の練馬・中野の住宅系ゾーン、新宿を中心としたビジネス系ゾーン、青山・六本木を中心とした商業系ゾーン、大門から月島に至る臨海ゾーン、隅田川東部の下町系ゾーン、上野・本郷・神楽坂などの文教系ゾーンなどの異なるゾーン群を緊密に結ぶ。（図-1）。言い換えれば大江戸線は、山の手の活発なビジネス街、ウォーターフロント地域、江戸情緒が色濃く残る下町、明治から昭和初期の昔街などの多彩な地域を走る路線である。

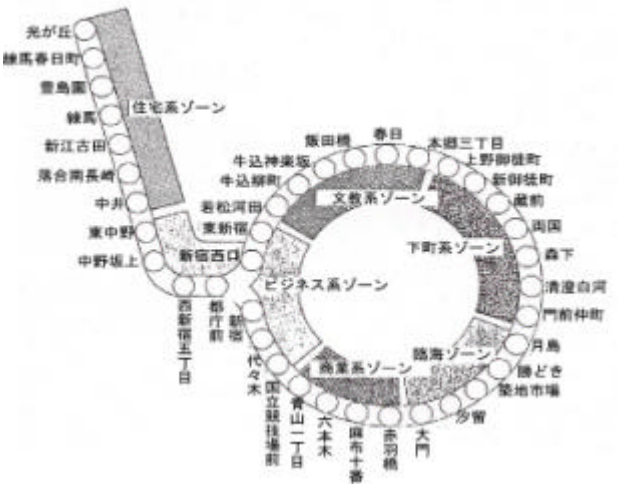

図-1　沿線ゾーン区分

3　各駅の利用者属性特色

大江戸線利用者の各駅毎の属性を切り口として各駅の特徴を述べる。

（1）年齢による分類

各駅毎のアンケート回答者の年齢分布は図-2 のようになった。

特徴的なのは国立競技場駅では 20 代以下の割合が他の駅に比べて高く、築地市場駅、門前仲町駅、蔵前駅、新御徒町駅、上野御徒町駅、牛込柳町駅、若松河田駅、東新宿駅では 50 代以上の比率の高い（約 50%）ことである。

国立競技場駅においては、サッカー等のスポーツ観戦やイベント等により、若年層の利用が多く、50 代以上の中高年層の利用が比較的少ないと考えられる。

キーワード：ゾーン、利用者属性

連絡先：名古屋市千種区不老町　名古屋大学大学院工学研究科地圏環境工学専攻　Tel 052-789-3831

一方、築地市場、門前仲町駅、蔵前駅、新御徒町駅、上野御徒町駅、牛込柳町駅、若松河田駅、東新宿駅は、臨海地域、下町地域と呼ぶことができるが、古くからの住民が多く、以前は都バスしか移動手段がなかった
域である。そのため、都バスの代替手段としての大江戸線という意味合いが強い。したがって、老年層が気軽に利用できるような駅施設、具体的にはエレベーター、上下エスカレーターの完備、わかりやすい案内表示といった、バリアフリーの配慮が他駅よりも重要になると思われる。また、門前仲町駅、上野御徒町駅は乗換駅でもあるので乗換利用者と高年齢層の利用者との共存といった課題も見えてくる。

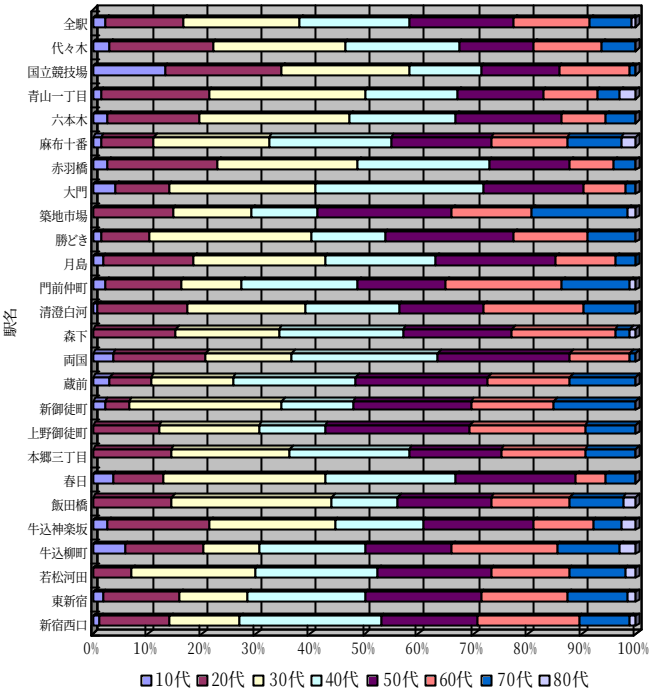

図-2　利用者の年齢分布

（２）職業、利用目的による分類

職業による分類を図-3 に、また利用目的による分類を図-4 に示す。

全体的に、会社員と公務員、パート・アルバイトをあわせた勤め人の割合が高く、利用目的も通勤、通学、業務目的が大半を占めている。職業と利用目的はある程度符合していて、勤め人の割合の高い青山一丁目駅や大門駅においては利用目的として通勤、業務を挙げた割合が多く、主婦や無職の割合が高い国立競技場駅、築地市場駅においては買い物、行楽といった目的での地下鉄利用が多い。

通院目的での利用が目立つ若松河田駅は、東京女子医大病院の最寄駅である。この他にも、築地市場駅、赤羽橋駅、飯田橋駅付近に病院があり、これらの駅では交通弱者に対するケアがより重要であるといえる。

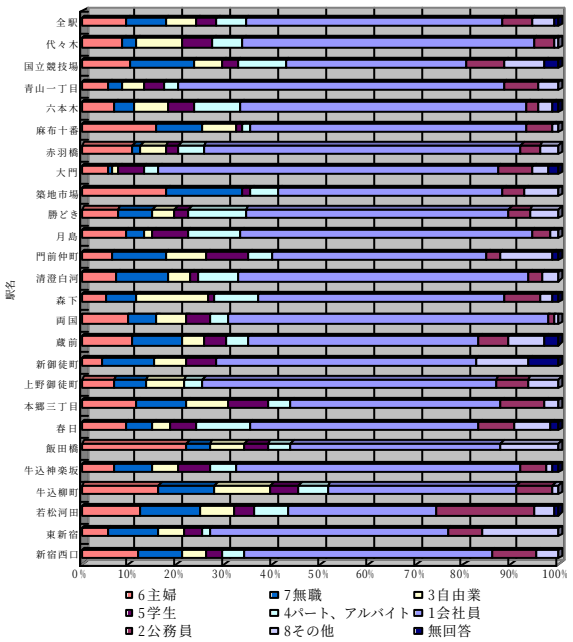

図-3　利用者の職業分布

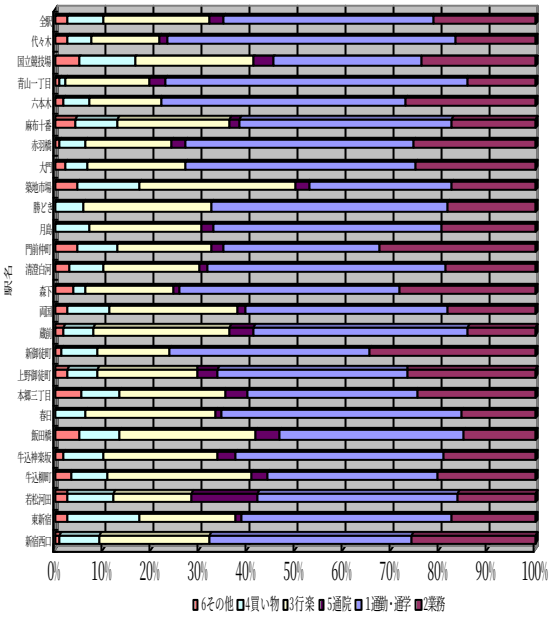

図-4　利用者の目的分布